

IT 資格制度からデジタルプラクティスが目指す プラクティスについて考える

デジタルプラクティス編集委員会委員長 平田圭二

プラクティスとは何だろうか。すでに確立された技術や手法や考え方でも、現場に適用してみると期待した効果があがらない場合がある。あるいは、やればできると周到に準備したにもかかわらず、実際にやってみたら予期せぬ問題に直面する場合もある。そのような時、適用する技術に現場で大なり小なり修正を施したり、工夫を加えて問題を解決していくことはプラクティスに含まれる。例えば、モノ作りの現場や人間や社会的要素が関わってくるサービスの現場等では、目標や手段が曖昧に表現されていたり、暗黙の前提や未知の要素が隠れているためプラクティスが必要となる場合が多く、課題達成における「ラスト 1 マイル」と換言することもできる。そして、そのプラクティスの結果が桁違いの改善をもたらしたり、それが多くの技術者に共通して有用なプラクティスであるような時、それはベストプラクティスと呼べるだろう。定型的な実現法が存在しない課題を達成しなければならない時にも多くのプラクティスが必要となる。ある仕事に慣れて以前より上手く処理できるようになったのはプラクティスによる知見が蓄積されたからである。個々の技術者自身が現場で手を動かして試行錯誤の中で知見を生み出し蓄積することがプラクティスの目的である。

さて、本号では高度 IT 資格制度の特集を組んだ。IT に関する資格は単に IT の知識を問うだけでなく、個々の IT 技術者が身に付けているプラクティスを生み出す能力も測らなければ意味がない。つまり、IT に関する資格制度を考えることは IT に関するプラクティスとは何かを考えることに通じる。本特集の論文から、IT におけるプラクティスの重要性が世界でも認識されていることを感じていただけたらと思う。そして、本特集のゲストエディタが中心となって推進している高度 IT 資格制度は、これまで実施運用されてきた様々な IT 資格制度の経験を踏まえた上で、未来社会が必要とする IT 技術者像を明らかにする試みの 1 つとも考えられる。そこには、個々の IT 技術者がより良いプラクティスのために何を学ぶべきか、どのように日々精進すべきかのヒントが潜んでいる。このように考えると、高度 IT 資格制度の設計・実施とデジタルプラクティスの編集・発行には共通点があることに気付かされる。本特集を通じて、読者著者の皆様と未来社会が必要とする IT 技術者像をともに作り上げ共有していければ幸いである。